

Sūyagaḍaṅga 第一篇第4章の研究——part (1)——

榎 本 正 明

この小論は故 Alsdorf 博士によって Text の校訂・翻訳・註解がなされている^①、Sūyagaḍaṅga (以下 Sūy.) 第一篇第4章に関する、Alsdorf 博士の研究の補足を目的としたものである。この Sūy. I.4 は “Itthipariṇṇā (Striparijñā, 女性を知って捨てる)” という表題が付され、「女性を非難し、女性に近づかないよう修行者を諭すこと」を内容として説かれているものである。今回は第4章第1節の verse 1~10 に於ける問題箇所について検討を加えてみた。

まず、Sūy. I.4.1.1 では、

je māyaraṃ ca piyaraṃ ca, vippajahāya puvva-saṃjogaṃ /
ege sahite carissāmi, ārata-mehuṇo vivittesi //

「母親を、父親を、そして、以前の絆を捨てて、一人完成して修行しよう、と遠離を求めて、性的行為をやめる」と述べられている。この中でまず、pāda b について Alsdorf 博士は、“vippajahāya” を “vippajahāi” に訂正している。それは、pāda a の関係代名詞 “je” の定動詞がないと Alsdorf 博士が考えているからである。しかし、彼の訂正は不必要であると思われる。というのは、そもそも pāda a の “je” は以下に述べる verse 2 の pāda a の “taṃ” にかかるものであると考えられるので、その定動詞は、verse 1 のどこにあっても不都合でない。そこで、pāda b の “āratamehuṇo vivittesi” (定本は “vivittesu” であるが、Alsdorf 博士に従い異本の “vivittesi” を採用した^②) を見ると、「性的行為をやめ、遠離を求めている。」と訳すことができる。そして、ここに、“hoi (bhavati)” が省略されていると思われる。それゆえ、“vippajahāya” という Text に従って良いのではないかと思われる。

次に、pāda c の “sahite” について、Alsdorf 博士は注釈書の Cūrṇi や Ṭikā の説明に満足せず^③、“asahita” の “a-” が sandhi で消えているものと考えている。すなわち、「他人と伴わず」と解釈している。この “sahita” は (sam-/dhā) でなく、(√sādh) である可能性もある。この語は此处だけでなく、Sūy. の他の場所にも見られ、修行者、特に完成に達した修行者の形容詞として用いられているし、何れの場合も、“sahiya” と書かれており、“asahiya” とは書かれていない。だから、この場所も、“√sādh” の派生形としての “sahita” と考え、このままで良いように思われる。更に、Alsdorf 博士は彼の後の論文で^④、Uttarajjhāyā 15.1 の “sahie” という語に対する説明では、“asahita” とはせず、“√sādh” からの派生した言葉であるとしている。これは、故 Schubring 博士の Āyāraṅga に対する語彙表に従ったものと考えられる。また、この Uttarajjhāyā 15.1 で “sahie” が用いられる文献は、この Sūy. の場所と同じように、これから出家生活を送ろうという決意を表明する文脈である点も共通するのである。だから、Sūy. のこの場所も、“√sādh” の派生形としての “sahita” と考え、「完成した」という意味で理解しても良いと考えられる。

次に、Sūy. I.4.1.2 では、

suhumeṇaṃ taṃ parikkamma, channa-paṇa itthio maṃdā /
uvvāyaṃ pi tāu jāṇaṃsu, jahā lissaṃti bhikkhuṇo ege //

「[前偈より] 人に優しく、ひそやかな歩みで、甘い言葉で近づく女は、どのようにしてある乞食の修行者達を(彼女の)虜にするか、という手段をしっている。」

と述べられている。この中で、pāda d の “lissaṃti” について、Cūrṇi は “sambadhyate (結びつけられる)” と言い換え、Ṭikā は “tāsu saṅgam upāyanti (彼女達に執着するに至る)” として、“śliṣyante (ひつつく)” という Skt. を与えている。これに対して、Alsdorf 博士は註としては何も述べていないが、“some monks will suffer a (moral) breakdown (ある修行者達は道徳的破壊を味わうだろう)” と訳しているところから考えると、“lissaṃti” を “√lis (<√ris) = break asunder (ばらばらに砕く)” と理解しているようである。しかし、Cūrṇi や Ṭika のように、“√śliṣ” に理解しても不自然ではない。また、Pischel の *Comparative Grammar of the Prākṛit Languages* (以下 Pischel.) の §315 には、Skt. の “śl-” が Pkt. では “l-” になる用例が記載されている。だから、Cūrṇi や Ṭikā に従って理解しても良いのではないかと考えられる。

次に、Sūy. I.4.1.6 では、

āmaṃtiya ussaviyā bhikkhuṃ, āyasā nimaṃtemti /
etāṇi ceva se jāṇe, saddāṇi virūva-rūvāṇi //

「彼女達は話し掛け、いい気にさせ、乞食の修行者を(自らの)身体によって招く。これらの言葉を、彼はおぞまし

いものと知るべきである。」

と述べられている。この中で、pāda b の “āyasā” について、Alsdorf 博士は何も註訳していないが、Cūrṇi は “āyasā nāma ātmasā (āyasā というのは ātmasā である)” とし、Ṭikā は “ātmanā nimantrayanti (自ら招く)” とする。この内、Cūrṇi の “ātmasā” という Skt. 形は存在しない。“āyasā” の “āya-” は、通常 Skt. の “ātman” の Pkt. 形であるとされるので、“āya-” の方は理解できたが、“-sā” の方は理解できずに、そのまま残したものであろう。Ṭikā の方は “-sā” が理解できていたか、否かについては、何方とも判別し難いが、“ātmanā” という Instrumental 単数の Skt. に相当すると考えていたことは確かである。視点を変えて、“āya-” が “ātman” でないと考えてみよう。まず考えられるのが、Skt. の “āya (<ā-√i) [到来]” であるが、pāda b の中だけなら「到来によって招く」とある程度、意味が通じるように思えるが、pāda a 等との関連に於いては文脈上そぐわない。しかし、Skt. の “kāya” と考えることはどうだろうか。“kāya” と考えると「(自らの) 身体によって招く」となり、文脈的にも相応する。さて、Pischel, § 355 には、このような “-sā” の Instrumental の形が多数挙げられており、“manasā, vayasā (vacasā)” といった -s 語基の Instrumental の影響によってできた形で、“kāyasā” も挙げられている。また、Uttarajjhāyā 8. 10 では、“manasā vayasā kāyasā” という用例が見られる。これが定型化された後、語頭の “k-” が脱落したものと考えることもできる^⑦。何れにしても、他にこのような用例が見出されない限り、此処だけの用例では、確定することはできないが、文脈、語形などを総合すると、“kāyasā” の可能性が強いように考えられる。

最後に、Sūy I. 4. 1. 7 では、

maṇa-baṃdhaṇehiṃ negehiṃ, kaluṇa-viṇīyam uvagasittāṇaṃ /
adu maṃjulāiṃ bhāsaṃti, āṇavayaṃti bhinna-kahāhiṃ //

「種々の心を縛るものを備え、あわれそうに、おとなしく近づいて、はたまた、甘い言葉によるとりとめもない話によって人をなびかせる。」

と説かれている。この中で、まず pāda d の “āṇavayaṃti” について、Schubring 博士は何も註釈して書いていないが、“ānamayanti (なびかせる)” に相当する訳を与えている。Alsdorf 博士もこれに賛成している。しかし、両者ともその訂正の根拠を見出してはなかったようであるが、事実、Prakrit Text Society の Text では、“āṇamayanti” と記されている。次に、同 pāda の “bhinna-kahā” について Alsdorf 博士は、Skt. の “bhinna” に “open (開いた), expended (拡大した)” という意味があり、それは、“(water) having free flow (勝手気儘に流れる水), (water) breaking forth (迸る水)” に関連した場合に用いられるとする。そして、この意味がここで相応しいと考えて、“by giving loose to talking (言葉が出るに任せて喋ること)” と訳している。ところで、仏教の十悪業道の内、口業道の一つに綺語(雑穢語)があり、その原語は Pāli では “sampha-(p)palāpa” であるが、Skt. では “sambhinna-pralāpa” である。その内の “sambhinna” は Edgerton の *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary* によると “confused (混乱した)” という意味がある。だから、ここの “bhinna-kahā” も、仏教の十悪業の “sambhinna-pralāpa” と共通したものを指していると考えられ、「とりとめのない話」と訳すことができると思われる。

以上、Sūy. に対する研究の一つである、Alsdorf 博士の “Itthipariṇṇā” を基にして、博士の研究に幾つかの補足をなしたものである。

註① L. Alsdorf, “Itthiparinnā”, *Indo Iranian Journal*, 2 (1958), pp. 249~270.

② Text として, *Ācārāṅgasūtra and Sūtrakṛtāṅgasūtram*, with the Nirukti of Ācārya Bhadrabāhu Svāmi and the commentary of Śīlāṅkacārya, Lālā Sundarlāl Jain Āgamagranthamālā, Vol.1, original ed. Late Ācārya Sāgarānandasūriji Mahārāja, Re-ed. with appendices etc. by Muni Jambūvijayajī, the disciple of Late H. Holiness Munirāja Śrī Bhuvanavijayajī Mahārāja, Motilal Banarsidass Indological Trust, Delhi 1978. を用いた。

③ Cf. Alsdorf, op. cit., p. 256.

④ Cūrṇi では “sahito nāṇādihi (知などを備えた)” とされ、Ṭikā では “sahito jñāna-darśana-cāritraiḥ, svasmai vā hitaḥ svahitaḥ [知・見(信仰)・行を備えた、或いは、自分の為の利益、自己の為にする]” と述べられている。

⑤ 例えば、Sūy. I. 2. 1. 13, I. 2. 2. 30, I. 2. 2. 32, I. 2. 3. 12, I. 2. 3. 19 等に見られる。

⑥ L. Alsdorf, “Uttarajjhāyā Studies”, *Indo Iranian Journal*, 6 (1962), p. 121.

⑦ Ardha-Māgadhī では語頭の子音が消えることがある。Pischel, § 186, § 252 には語頭の y- が消える用例が示されている。

⑧ *Sūyagaḍaṅgasutta (part 1)*, with Bhadrabāhu's Nirukti and Cūrṇi by anonymous writer, Prakrit Text Society Series No. 19, ed. Muni Śrī Punyavijayajī Ahmedabad 1975.